

第32回国民文化祭・なら2017

第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会

# 第1章 写真編

# 皇太子同妃両殿下御視察の様子

## ● 第1日 9月2日(土)



近鉄奈良駅に御到着



東大寺大仏殿に御移動



東大寺大仏殿に御到着



オープニング「開会式」



オープニング「開会式」出演者との御交流



オープニング「開会式」に御臨席

● 第2日 9月3日(日)



王寺ハンドベル・フェスタ参加者との御交流



車いすダンスパフォーマンスを御覧になる



近鉄奈良駅を御出発

# 文部科学大臣賞

音楽

## 〈大正琴の祭典〉



【ソロ部門 A】

橋本 莉

(三重県・南伊勢町立南島中学校 1年)



【ソロ部門 B】

江本 愛夢

(岡山県・岡山龍谷高等学校 2年)



【アンサンブル部門 B】

ヘイキッズ (鹿児島県)

芸術

〈のせ川フォトコンテスト〉



【写真】

「星降る夜」

山本 公弘（奈良県）

## 〈将棋フェスティバル〉



【一般の部】  
木村 秀利 (大阪府)



【中学生の部】  
伊藤 巧  
(愛知県・春日井市立鷹来中学校2年)



【小学生(高学年)の部】  
小林 誠  
(大阪府・和泉市立いぶき野小学校5年)



【小学生(低学年)の部】  
高橋 侑大  
(兵庫県・神戸市立東須磨小学校2年)

### 〈小倉百人一首競技かるた全国大会〉



東京都かるた協会

### 〈世界ハンディキャップ IGO 選手権〉



付鵬（中国）

〈連句の祭典〉

【連句】

二十韻「風邪に寝て」の巻

埼玉県 捌 白根 順子

風邪に寝て俄かに人のなつかしき  
屋敷林より梟の声  
白根 順子

収穫の根菜籠にあふれていて  
宮本 艶子

小川で洗う子供らの足  
田口 晶子

ウ 月さやか影伸びている時計塔  
川岸 富貴

ロザリオ祭に確かめる愛  
三澤 律乃

もう少し歩こう霧に濡れながら  
順

穴だらけなる東京の地下  
晶

小池知事上げた拳のさげどころ  
富

夢もうつつも塞翁が馬  
律

ナオ 雨あがりぐるぐる茅の輪の匂いたる  
順

冷酒の杯に浮かぶ夕月  
艶

離れば華奢な男も懐かしく  
晶

涙壺買うベネチアの旅  
富

スパゲティ美味い不味いは茹で加減  
律

のっぺらぼうは物を言わない  
晶

ナウ 特選の内示ありたる絵画展  
順

雪形残る遠き山並  
艶

花の坂寺と社へ振り分けに  
晶

濯ぎもの干す清明の午後  
富

平成二十八年十二月八日 首尾

〈深吉野全国俳句大会〉

【俳句】 一般の部

深吉野に小さき文庫山桜

大阪府 小畑 晴子

〈日本のはじまり樫原へ、いざ川柳の祭典〉

【川柳】

題「鐘」

椿守大地へかえる鐘をきく

大阪府 森中 恵美子



## 【現代詩】 一般の部

## 手触り

新潟県 高田 一葉

今日はあれを潰すか  
 それがどんな特別な日だったのか  
 私には覚えが無い  
 幼児の頃の記憶である

祖父の家は  
 日に何本もバスの行かない田舎にあった  
 裏口を出ると鶏小屋があり  
 家を囲む竹林とその向うに僅かばかりの畑  
 たまに遊びに行くと  
 卵取りをさせてもらえるのが  
 一番の楽しみだった

その日も私は  
 鶏を追い回し卵を取って来たのだろう  
 気が付くと  
 祖父が白い一羽をぶら下げている  
 井戸端にしゃがんだ祖父の前で  
 私は動けなくなりました

羽を塗る  
 まな板に  
 手押しポンプの水が弾ける  
 中華風の太ぶりの包丁が  
 すっすつと  
 分かり易い引き算をするように  
 こちからあちらへ  
 塊を切り分けていく

これが何  
 これが何  
 これが明日の卵  
 これが明後日の卵  
 ぼそりぼそりと声が掠める  
 夕日が斜に差したその時間に  
 私は飲み込まれていた  
 父の切り取られた癌組織を見た  
 祖父も父も癌にやられた

明る過ぎる蛍光灯の下  
 差し出された銀のトレーに  
 あの日の祖父の手捌きが浮かんだ  
 心が引き付けをを起こし  
 積もった時が殻を割る  
 明日生まれる卵  
 明後日生まれる卵  
 研がれた包丁が  
 すつと走る  
 あちらからこちらへ  
 削がれていく今日を  
 やつと今

両の手に受ける

【現代詩】 中学生・高校生の部

## 海に見える山から

宮城県 東北生活文化大学高等学校 三年 水野 響

「いつてきます」と「ただいま」はワンセットです  
子供を亡くしたお母さんの言葉

灰色の雲が浮かぶ風の中  
鳥居の下にある空き地を 見下ろしてみる

そこには たしかに街はあった  
人々の暮らしもあった

あの橋の上において助かった人も  
そうでなかった人もいる

この山に逃げてきた人も  
下りてしまったつきりの人もいる

たくさんと言えなかった「ただいま」が  
鳥居の下に散らばっている

だからこそ

今日も元気に帰る

「ただいま」

【現代詩】 小学生の部

## ろ天ぶろ

岩手県 奥州市立木細工小学校 四年 菊池 望夢

「ほりの内さんがたおれた。」

じいがざんねんそうに言った。

登下校であいさつすると、元気に

「おはよう。」

と言ってくれたほりの内さん。

魚つかみの日にはきかいで、

水をためてくれていたほりの内さん。

すごく元気だったのに

ぼくはとつてもおどろいた。

「これ、あげるね。」

悲しそうにおくさんが言った。

引っこすことになったのだ。

組み立て式のろ天ぶろ。

じいといっしょに軽トラに乗せた。

「もうしわけねえ。」

じいは、元気づけるためにわらった。

運動会の日、おくさんは引っこした。

ろ天ぶろを、じいといっしょに組み立てた。

「小屋が必要だな。」

じいと二人で山から木を運ぶ。

半分に切った丸太を柱につける。

ぼくがおさえて、

じいがとんかちでたたく。

何日もかかって完成した。

山の葉の色は赤くなっていた。

「さあ、入るぞ。」

じいの一言で妹達もはしゃいでいた。

ぼくも、この日を待っていた。

一番最初に入ったぼく。

お湯の温度はちょうどいい。

空は、うっすら暗くなっていた。

ほりの内さん

お空で見ているかな。

「ありがとう。」

言えなかった言葉を心の中でつぶやいた。